

「体を使うことは考えること」
話す大巻伸嗣さん＝東京都
の東京芸大上野キャンパス



「体を使うことは考えること」
「何の工夫も凝らす、受動的に既製品を食べる。『ちょっと甘いとか塩辛いとか、体に備わった機能を使い切らないまま生きていくと、どんどん鈍感になる』と危惧する。『仕方がない』と言ってしまえば、そこで終わり。『思

その後、学生はスーパーで食材を買ひ、少しずつ料理をするようになった。料理は段取りが大事。順を追って考えることができるようになったのだらう。それまで『将来の夢

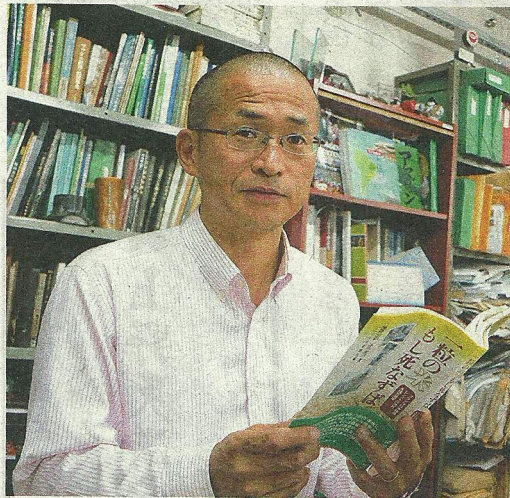
ブラジル移民の100年たどる

ブラジルのサンパウロに本社のある日本語の日刊紙「ニッケイ新聞」の編集長・深沢正雪さん(四七)が、静岡県沼津市出身、三重大学が、同国への日本人入植者の百年に及ぶ歴史を描くノンフィクション『一粒の米もし死なずば』を刊行した。一九一〇年代から

同国・レジストロ地方に入植した日本人とその子孫たちの生き方を、時代と重ねて丹念に追った貴重な力作だ。

レジストロ地方は、サンパウロから南西に約百八十里離れた農業地域。日本人の入植前から「世界一」に認定されるほど優れたコメが作られていた。本書は、今日ではあまり知られていない移民の主導者・青柳郁太郎(一八六七―一九四三年)がこの地域に着

現地日本語新聞の連載を本に



目し、一九一二年に最初の「日本人植民地」を設立した過程から書き起こしている。背景にあるのは、日本の明治から大正にかけての人口増やコメ不足。欧州諸国の植民地政策に刺激された対外膨張主義も相まって、アジアや南洋、南米への移植が国策とし

①自著を手にする深沢正雪さん＝ニッケイ新聞社提供
②入植者の生活を伝える「ブラジル移民住宅」＝博物館明治村提供



て進められた。ブラジルは、その重要な進出先だった。入植初期の混乱やそれを乗り越えた人々の労苦。第二次世界大戦中の「敵国人扱い」や、敗戦後に「本当に日本は負けたか」をめぐる日系人同士が抗争した悲惨な「勝ち組・負け組」事件。さらには

深沢さん 労苦の歴史 詳細に

紅茶やバナナ栽培などに活路を見いだした戦後の歩み。本書はそうした史実を、豊富な資料や多くの関係者への取材を踏まえて詳細に伝える。遠い国の話のようだが、長野県出身者が多かったり、レジストロ市と岐阜県中津川市が姉妹都市だったりと、中部

地方との縁も深い。博物館明治村(愛知県大山市)にある「ブラジル移民住宅」も、一九一九年にレジストロで建てられた家を移設している。

本書は、ニッケイ新聞に二〇一三年から執筆した百二十七回もの連載の集大成。「読者の平均年齢は八十歳前後と推察され、そう遠くない将来に廃刊に至るだろうと思いますが、その前に少しでも、日本のみなさんにブラジルにこ

「Liminal Air Space」は、暗い空間で羽衣のようになつてやがた布が風に揺らぎ、優美な曲線が連続して出現する。布の擦れる音、光、途切れることのない動き……。いつの間にか体をもっていられる。

「人の時間を奪つ作品をつ

んな日本人がいたことを伝えたい」と深沢さん。「いま日本で育ちつつある日系ブラジル人の若い世代にも、自分たちの祖先の歴史に興味を持ってほしいと切に願います」
無明舎出版刊。二千五十二円（税込み）。（三品信）

INFORMATION

名古屋市博物館「感じる縄文時代」展の入場券プレゼント 縄文時代の暮らしぶりを火炎型土器＝写真、同館蔵＝など代表的出土品と解説、スマートフォンを活用した音声案内などで「感じる」ことができる同展（2月8日まで）入場券を5組10人に。毎週土曜

の後2から学芸員が解説するほかワークショップも。プレゼント希望者は、はがきに住所、電話番号、氏名を書き、13日までに〒460 8511 中日新聞文化部「縄文展」係へ。



ひもじく

古沢 保

海部立田局（愛知）

シャキシヤキ、ポクポク、歯応え

もおいしいレンコン。穴が開き「先が見通せる」ことから縁起物とされ、お節料理で食した人も多いだろう。愛西市は茨城、徳島に次ぐ日本三大産地の一つ。木曽川流域

風景に刻まれた印



のゼロメートル地帯で農業が困難だったが、天保年間に一人の僧が門前に植えたのを機に水害に強い作物として定着したという。

ぷらっと・旅
JF東海エリア

冬 飛騨 岐阜 吹雪 お得